

令和元年6月21日現在

機関番号：34301
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2015～2018
 課題番号：15K21499
 研究課題名(和文) 北朝鮮の音楽政策に関する研究

研究課題名(英文) Research on music policy of North Korea

研究代表者

森 類臣 (Mori, Tomoomi)

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：60635093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、北朝鮮における文化政策のうち、音楽政策を研究対象とし、音楽政策の実態とその意味を明らかにすることに注力した。研究対象を歴史社会的アプローチによって時代別に大枠を整理し、さらに音楽と政治を扱う社会学理論を援用して分析した。このような分析によって北朝鮮の音楽政策を説明する基本的なモデルを導出し、その後にモデル有効性について金正恩体制まで射程に入れて検証した。その結果、(1)金日成～金正日時代に行われた音楽政策の基礎理論の整理 (2)北朝鮮の音楽政策理論の独自性とモデル化 (3)金正恩体制の音楽政策へのモデル適用の有効性、などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、北朝鮮の音楽政策の実態とその意味の一端を明らかにした。北朝鮮社会では、音楽は芸術領域や個人の趣味を越えたものとして重要視されている一方、朝鮮半島の文化的同質性や民族的正当性、「人民」の情緒を表現するものとされている。金日成体制下では、音楽政策は「歌政治」とされ、イデオロギーや政策を伝える手段として重要視されていた。続く金正日体制下では音楽政策は「音楽政治」と表現され、それは現在の金正恩体制でも継続している。北朝鮮社会において音楽はこのような意味を持っているため、音楽政策の研究は北朝鮮の政治社会的動向の理解につながる。

研究成果の概要(英文)：This research is focused on cultural policies in Democratic People's Republic of Korea(DPRK / North Korea), especially music policies. I focused on clarifying the actual state of music policy and its meaning. I arranged the outline of flow of North Korean Music by historical sociological approach. And I analyzed North Korean music policy by sociological theory dealing with music and politics. Based on this analysis, I derived a basic model to explain North Korean music policy, and then examined the validity of the model in the range of Kim Jong-un's period. As a result, I clarified about North Korean Music policy as follows, (1) About the basic theory of music policy in the Kim Il Sung era (2) The uniqueness of North Korea's music policy theory and its modeling (3) The effectiveness of the model application to music policy of Kim Jong-un regime

研究分野：社会学

キーワード：朝鮮民主主義人民共和国 北朝鮮 音楽政治 文化政策 音楽 芸術

1. 研究開始当初の背景

日本における朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）に関する研究（以下、北朝鮮研究）は、北朝鮮国内の政治構造の分析、北朝鮮をめぐる経済構造の分析などナショナルな関係を扱う研究や、安全保障などを扱う国際政治学的研究に力点が置かれてきた。それらの研究の重要性は言を俟たないものの、一方で、北朝鮮の文化や日常生活についての研究は注目されずにいた。その理由は、政治・経済分野に比べて二次的な研究とされてきたこと、依拠できる一次資料が乏しいことなどである。しかし近年、文化・日常生活研究が進捗を見せている（Suzy Kim(2013)、カンドンワン(2014)など）。その理由に（1）北朝鮮と国交のある旧社会主義国がアーカイブで資料公開をし始め、それによって一次資料の発掘が続いていること（2）韓国において、脱北者への聞き取り調査による文化・日常生活研究が進んでいること（3）北朝鮮自身が、ウェブによって文化コンテンツを発信し始めたことなどが挙げられる。

このような問題意識にしたがって、研究代表者（森）は、本研究課題申請以前に、北朝鮮の文化・日常生活に注目して多くの研究会・学会会議をコーディネートしてきた。例えば、「朝鮮戦争を検証する—停戦 60 年目」（2013 年 11 月 23 日、於立命館大学）「北朝鮮研究の新たな視座—生活、文化、歴史—」（2014 年 8 月 2 日、於同志社大学）などである。研究代表者（森）は、今まであまりスポットが当たらなかったこの分野の研究を進捗させることが、日本における北朝鮮研究に厚みを持たせると考えている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、北朝鮮における文化政策のうち、音楽政策の実態とその意味を明らかにすることである。北朝鮮社会では、音楽は芸術領域や個人の趣味を越えたものとして重要視されている。金日成体制下では音楽政策は「歌政治」とされイデオロギーや政策を伝える手段として重要視されていた。続く金正日体制下では音楽政策は「音楽政治」と表現され、それは現在の金正恩体制でも継続している。北朝鮮社会において音楽はこのような意味を持っているため、音楽政策の研究は北朝鮮の政治社会的動向の理解につながる。

3. 研究の方法

本研究では、北朝鮮の音楽政策について歴史社会学的アプローチによって整理し、さらに音楽と政治を扱う社会学理論を援用して分析する。分析によって音楽政策を説明するモデルを導出し、その後にモデル有効性について金正恩体制まで射程に入れて検証する。

- (1) 歴史的考察：北朝鮮建国期以降の主流音楽団の系譜を整理・分析する。
- (2) 理論的考察：音楽とプロパガンダを扱う社会学理論を調査・整理し、本研究における応用可能性を探る。
- (3) モデル構築：理論的考察で得た成果を基に、北朝鮮の音楽政策を説明するモデルを構築する。
- (4) モデルの検証：モデルの有用性・強度を、比較分析などを用いながら検証する。
- (5) 現状分析：現在進行形である金正恩体制の音楽政策について、その特徴を明らかにする。また、構築したモデルによって金正恩体制の音楽政策を分析し、モデルの有効性を測定する。

4. 研究成果

(1) 北朝鮮の音楽政策に関する歴史的考察

一次資料を収集・分析しながら、北朝鮮の主流音楽団の系譜を整理した。主流音楽団の系譜については歌劇団系列、オーケストラ系列、合唱団系列、軽音楽団系列というようにジャンル別に系列化する一方、それぞれの系列の関連性を把握した。また、党・軍・芸術諸団体のいずれの系列なのかという点からも分析を試みた。この作業の成果については、国際学会で発表を行った。

また、金日成時代、金正日時代、金正恩時代というように大まかな時期区分をしながら、各時代の音楽政策の特徴を導出した。各時代の政治経済状況、国際関係などを必要に応じて把握していった。その結果、金正日が芸術界を指導した時期には、金日成時代を超える多数の芸術関連書籍・論文、特に金正日の芸術理論を論評・解説するものが増えたことが分かった。金日成時代に基礎が作られた北朝鮮の音楽政策は、金正日によってその基礎理論の集大成が試みられたことが分かった。

(2) モデル構築

音楽政策の基本理論の内容について分析した。また、理論のみならず、金正日時代の主要楽団である万寿台芸術団・ピバダ歌劇団・普天堡電子楽団・旺載山軽音楽団(芸術団)などを事例研究した。それぞれの楽団の創立過程・目的・活動を把握し、金正日時代の音楽政策の基本モデルを構築することができた。

(3) モデルの検証

朝鮮民主主義人民共和国の音楽政策を説明するモデルについて、その基本構造を構築し、そのモデルの有効性を検証・確認することができた。

(4) 現状分析

モデルの有効性を踏まえつつ、金正恩時代の音楽事情について、その現状を社会政策や文化政策に位置づける作業を行った。特に、金正恩時代の政策上のキーワードである「並進路線」「社会主義文明国」「自強力第一主義」などと音楽政策の関連性を把握することに努めた。その上で、金正日時代における音楽政策との連続性を考察するという作業を進めた。その結果、「金正恩時代」の音楽政策の方向性、「金正日時代」の音楽政策との共通性、国家政策と音楽団の関係性についてはある程度解明できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

森類臣、「『金正恩時代』の『音楽政治』—牡丹峰楽団を中心に」、単著、依頼論文(査読無)、『現代韓国朝鮮研究』第 18 号(特集「北朝鮮研究の先端」)、現代韓国朝鮮学会、2018 年、pp.34-52

森類臣、「芸術公演『追憶の歌』が持つ意味」、単著、査読有、『北韓研究学会報』第 20 巻第 2 号、北韓研究学会、2016 年 12 月、pp.125-152 韓国語

森類臣、「新刊紹介(文化)『金正恩時代の文化：転換期北韓の文化現実と文化企画』」、単著、査読無、2016 年 3 月、『コリア研究』7 号、立命館大学コリア研究センター、pp.128-129

〔学会発表〕(計 7 件)

森類臣、「金正恩時代の『音楽政治』—新楽団創設と回顧音楽会の持つ意味—」、単独発表、現代韓国朝鮮学会第 18 回研究大会シンポジウム「北朝鮮文化研究の最前線」、2017 年 10 月 21 日、於大東文化大学

森類臣、「金正恩時代の『音楽政治』に関する考察—始動・定式化・展開—」、単独発表、研究フォーラム・北東アジア学会関西地域研究会「朝鮮半島をめぐる国際関係」、2017 年 6 月 24 日、於立命館大学

Tomoomi Mori, *A continuity and Innovativeness of "music policy" in the Kim Jong-un period*, Korea Global Forum 2016, 2016 年 11 月 14 ~ 15 日、ソウル(韓国)

森類臣、「楽団系譜で見る音楽文化の現在—牡丹峰楽団・青峰楽団を中心に」、単独発表、2016

TUMEN RIVER FORUM(Yanbian University)2016、2016年10月15日、延吉(中国)

森類臣、「『音楽政治』における継承と革新 - モランボン楽団をめぐる社会学的考察 - 」, 単独発表、現代韓国朝鮮学会第16回研究大会、於神田外語大学、2015年11月8日

Tomoomi Mori, *Why the Moranbong Band Matters? : A Sociological Analysis of the Moranbong Band*, The 2st World Conference on North Korean Studies, 2015年10月13日、ソウル(韓国)

森類臣、「モランボン楽団の意味とその社会的位相に関する考察」, 単独発表、International Society for Korean Studies(国際高麗学会)、The 12th ISKS International Conference of Korean Studies、於 University of Vienna、2015年8月21日、ウィーン(オーストリア)
韓国語での発表

〔図書〕(計 1件)

森類臣、「朝鮮民主主義人民共和国の『金正恩時代』における軽音楽路線—牡丹峰楽団、青峰楽団を中心に—」, 『韓国学と朝鮮学、その争点とコリア学1』、パラダイムブック、2018年、pp.361-385 韓国語

6. 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：水野 直樹
ローマ字氏名：Mizuno Naoki

研究協力者氏名：ペッカ・コルホネン
ローマ字氏名：Pekka Korhonen

研究協力者氏名：李 貞徹
ローマ字氏名：Lee Jung chul

研究協力者氏名：パク・ジョンチョル()
ローマ字氏名：Park Jong Chul

研究協力者氏名：チョン・ヒョンシク()
ローマ字氏名：Cheon Hyeon Sik

研究協力者氏名：全永善
ローマ字氏名：Jeon Young Sun

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。